

コロナ禍における  
聴覚障害児の保護者の困り感  
～休校措置を通して見えた聴覚障害児教育の課題～



## 目次

1. はじめに .....	2
2. アンケート概要 .....	3
3. アンケートの結果 .....	4
1) アンケートの回答の概要について .....	4
2) 子どもの在籍する教育機関と年齢について .....	4
3) 保護者の聴覚障害の有無 .....	5
4) コロナの影響を受け現在困っていることに関する概要 .....	5
a) 年齢別で見た現在困っていること .....	6
b) その他 設問 4 における自由記述回答 .....	7
5) 保護者の教育現場やその他の希望することに関する自由記述回答の結果 .....	8
a) 設問 5 教育現場に望むことに関する結果 .....	8
b) 設問 6 その他困っていることに関する結果 .....	10
4. 考察 .....	14
5. おわりに .....	23

## 資料

1 引用文献 .....	24
2 質問紙 .....	26

## 1. はじめに

昨年 2 月 27 日、政府により全国の小中学校、高等学校、特別支援学校に臨時休校が要請されました。この影響を受け、各地で卒業式、入学式の中止・縮小がなされ、さらに同年 4 月 16 日には全国を対象とする緊急事態宣言が発令され、同月 22 日時点の文部科学省(2020)の調査では全国 91%の学校で休校措置が取られました。その後、5 月 25 日に解除されたものの、約1年過ぎた現在も緊急事態宣言の発令と解除は繰り返されており、完全なコロナの終息は未だ見通しが立たない状況となっています。このことは子どもたちを取り巻く環境にも大きな影響を与えています。コロナの感染拡大の影響により、教育現場でも「新しい生活様式」を構築することが求められるようになりました。

マスコミによる報道では、連日のようにオンライン授業など教育現場における先駆的な取り組みが紹介されました。しかしながら、それらの動きのような対応が出来た学校は極めて少なく、同時双方向型のオンライン授業を通じた在宅学習を実施出来た学校は、昨年 4 月 16 日の段階で休校措置をとった学校のわずか 5%という状況でした(文部科学省, 2020)。

これらの生活様式の変化は、普通学校のみではなく、聴覚障害児教育の現場でも同様に混乱を招きました。聴覚障害児教育にとって、何がコロナ禍の教育体制として効果的な取り組みとなっているのかといった情報配信が無い中で、普通学校における先駆的な取り組みの紹介がメディアで先行したことは、聴覚障害児やその保護者に大きな不安を与えるきっかけにもなりました。

私はろう学校で勤務して 10 年近くになりますが、感染拡大を契機に保護者の方々の聴覚障害児教育に対する厳しいご意見を耳にすることが増えました。「何故、ろう学校の方が人数は少ないのに、分散登校が出来ないのだ」「何故、普通学校はオンライン授業が出来るのに、ろう学校はやらないんだ」というお声もありました。

しかし、その声簡単に答えることが出来ない教育現場の背景があり、教員たちは子どもたちへのより良い教育実現への切望と現場の不整備との狭間に立たされ、戸惑いを感じていました。例えば、ICT 環境の整備状況やシステムなどは各ろう学校を所管する地方自治体により大きく異なっています。また、教員の在宅勤務の環境が今でも整っていない学校は少なくありません。

私が今回この報告書を作ろうと思ったきっかけは、このような背景の中で 1 つの疑問が生じたことからでした。それは、「何故、保護者も教員も「どのようにしたら子どもたちにとって良い教育が出来るのか」「どのようにしたら学校の体制を新たなものに出来るのか」と同じ想いをもっているにも関わらず、すれ違いが起きているのだろう」というものです。

新型コロナウイルスのワクチンの開発などが着実に進む反面、未だ終息の兆しはありません。本報告書の内容が少しでも聴覚障害児教育関係者の皆さんの目にとまることで、コロナ禍における聴覚障害児教育がより良いものになることを心から願っています。

石川 阿

## 2. アンケート概要

### ▶対象

全国の0～20歳の聴覚障害児をもつ保護者 308名

### ▶調査方法

インターネット調査法(資料 2)によるアンケート調査を実施した。実施にあたっては、Google フォームにて回答フォームを作成し、その後、ろう学校に通う聴覚障害児をもつ保護者 5 名に対し、メールにて回答を依頼した。その際に調査協力者へは、本調査の主旨に同意した上で回答可能な聴覚障害児を有する保護者や関係教育機関に SNS を通して拡散してもらえるように協力を依頼した。

### ▶調査期間

2020年5月2日から同年5月8日(7日間)

### ▶質問項目

質問については、以下の6項目を設定した。在籍教育機関の種別については、それぞれの地方自治体の設置している公立ろう学校とその他の国立・私立ろう学校を分けて調査した。年齢については、それぞれ4月1日の時点での年齢とすることで、所属学年が明確に区分されるように設定し、複数の聴覚障害児を有する保護者を除き単回答とした。

1.教育の場

2.お子さんの年齢(複数の聴覚障害児を有する場合のみ複数回答)

3.保護者の方について

4.今、お困りのことは何ですか?(複数回答)

5.教育現場に望むこと(自由記述回答)

6.その他、今お困りのことがあればお書きください。(自由記述回答)



### 3. アンケートの結果

#### 1) アンケートへの回答の概要について

本調査を実施した結果、311件の回答を得た。そのうち、同一回答者と思われる回答や、本調査の対象機関に所属していない子どもをもつ保護者からの回答については、有効回答より除き、308件を分析の対象とした(表1)。

表1 設問ごとの回答数 <n=308>

設問	回答数	有効回答数	有効回答率(%)
①教育の場	311	308	99.0
②お子さんの年齢	311	308	99.0
③保護者の方について	311	308	99.0
④今、お困りのことは何ですか？	311	308	99.0
⑤教育現場に望むこと	171	164	52.7
⑥その他、今お困りのことがあればお書きください。	120	85	27.3

#### 2) 子どもの在籍する教育機関と年齢について

子どもの在籍する教育機関については、以下の結果であった。まず、回答結果のうち、241件が都道府県立や市立区立の公立ろう学校と多くを占めていた。その次に、普通保育園や幼稚園から高等学校まで(以下、普通校とする)が37件であった。

年齢についての回答結果のうち最も多かったのは、9-11歳(小学4-6年生)で82人であり、次に多かったのは、6-8歳(小学1-3年生)で81人であった(表2)。

表2 学校種・年齢別回答数

	公立ろう学校	私立・国立ろう学校	難聴学級	普通校	その他*	合計
0-2歳	16	0	0	1	0	17
3-5歳	45	5	0	4	0	54
6-8歳	58	4	3	16	1	82
9-11歳	68	2	4	8	0	82
12-14歳	55	8	8	5	0	76
15-17歳	35	1	0	1	0	37
18歳以上	10	1	0	2	0	13
全体	241	16	13	37	1	308

\*公立の特別支援学校(肢体不自由)

### 3) 保護者の聴覚障害の有無

保護者の聴覚障害の有無については、以下の結果であった。まず、聴覚障害のない保護者(以下、聴者)の家庭が 229 件とその回答のほとんどを占めていた。続いて手話を使用する聴覚障害者が保護者の家庭(いわゆるデフファミリー)が 60 件であった(表 3)。

表3 保護者について

	回答数	回答率(%)
聴者	229	74.4
聴覚障害者(手話使用)	60	19.5
聴覚障害者(音声日本語使用)	5	1.6
聴者・聴覚障害者両方がいる	14	4.5
合計	308	100

### 4) コロナの影響を受け現在困っていることに関する概要

コロナの影響を受け現在困っていることについては、以下の結果であった。「g.子どもの運動不足」(246 件)、「b.子どもが友達や先生と会えないこと」(226 件)、「c.学校の授業が進まないこと」(187 件)、「h.生活リズムが崩れていること」(177 件)の順番で多かった(表 4)。

表4 コロナの影響を受け現在困っていること;全体 <複数回答> n=308

	回答数	有効回答率(%)
a.子どもを見ながら仕事をする	42	13.6
b.子どもが友達や先生と会えないこと	226	73.4
c.学校の授業が進まないこと	187	60.7
d.勉強をする習慣がつかないこと	143	46.4
e.進路・就職に関して進められないこと	39	12.7
f.子どもの食事の準備や栄養面	93	30.2
g.子どもの運動不足	240	77.9
h.生活リズムが崩れていること	177	57.5
i.習い事に行けないこと	83	26.9
j.大人が子どもとずっと一緒にイライラすること	77	25.0
k.子どもがゲームやYou Tubeばかりしていること	137	44.5
l.家で何をしたいのかわからないこと	52	16.9
m.子どもの発音について	53	17.2
n.子どもの手話環境について	94	30.5
o.大人が手話を学ぶ機会がないこと	61	19.8
p.大人が相談できる相手がいないこと	26	8.4
q.大人が子どもに学校の宿題を教えられないこと	50	16.2

a) 年齢別で見た現在困っていること

設問 4 について、年齢別に回答数とその回答率を示した(表 5,表 6)。年齢別で見た結果、「b.子どもが友達や先生と会えないこと」と「g.子どもの運動不足」についてはどの年齢群でも高く、「c.学校の授業が進まないこと」は中高生が最も高い数値であった。さらに、「n.子どもの手話環境について」「o.大人が手話を学ぶ機会がなくなること」の手話環境については幼稚部以下の 2 群が他の群よりも高い選択率を示した。特に、「p.大人が相談できる相手がいないこと」の選択率が乳幼児教育相談の群だけが他よりも高かった。

表5 コロナの影響を受け現在困っていること;年齢別(件) <複数回答>

	0-2歳 教育 相談	3-5歳 幼稚部	6-8歳 小学部 低学年	9-11歳 小学部 高学年	12-14歳 中学部	15-17歳 高等部 普通科	18-20歳 高等部 専攻科	全体
a.子どもを見ながら仕事をする	4	9	8	14	12	2	1	42
b.子どもが友達や先生と会えない	12	49	59	60	57	29	7	226
c.学校の授業が進まない	1	19	49	57	60	30	7	187
d.勉強をする習慣がつかない	1	22	45	42	41	24	3	143
e.進路・就職に関して進められない	1	3	1	6	11	19	6	39
f.子どもの食事の準備や栄養面	6	26	29	29	16	12	5	93
g.子どもの運動不足	12	43	61	70	62	30	8	240
h.生活リズムが崩れている	9	25	48	49	49	27	9	177
i.習い事に行けない	1	12	25	30	20	9	2	83
j.大人が子どもとずっと一緒にイライラ	7	26	19	24	14	6	2	77
k.子どもがゲームやYou Tubeばかり	4	21	36	38	44	20	3	137
l.家で何をしていたのか分からない	8	12	8	15	11	3	2	52
m.子どもの発音について	5	14	18	11	7	5	1	53
n.子どもの手話環境について	9	30	23	18	11	6	1	94
o.大人が手話を学ぶ機会がなくな	10	24	14	9	3	2	0	61
p.大人が相談できる相手がいない	6	7	7	7	4	0	0	26
q.大人が子どもに学校の宿題を教えられない	1	4	18	19	20	6	0	50

表6 コロナの影響を受け現在困っていること;年齢別(割合) <複数回答>

	0-2歳 教育 相談	3-5歳 幼稚部	6-8歳 小学部 低学年	9-11歳 小学部 高学年	12-14歳 中学部	15-17歳 高等部 普通科	18-20歳 高等部 専攻科	全体
a.子どもを見ながら仕事をする	23.5	16.7	9.6	16.9	15.8	4.8	7.7	13.5
b.子どもが友達や先生と会えない	70.6	90.7	71.1	72.3	75.0	69.0	53.8	72.7
c.学校の授業が進まない	5.9	35.2	59.0	68.7	78.9	71.4	53.8	60.1
d.勉強をする習慣がつかない	5.9	40.7	54.2	50.6	53.9	57.1	23.1	46.0
e.進路・就職に関して進められない	5.9	5.6	1.2	7.2	14.5	45.2	46.2	12.5
f.子どもの食事の準備や栄養面	35.3	48.1	34.9	34.9	21.1	28.6	38.5	29.9
g.子どもの運動不足	70.6	79.6	73.5	84.3	81.6	71.4	61.5	77.2
h.生活リズムが崩れている	52.9	46.3	57.8	59.0	64.5	64.3	69.2	56.9
i.習い事に行けない	5.9	22.2	30.1	36.1	26.3	21.4	15.4	26.7
j.大人が子どもとずっと一緒にイライラ	41.2	48.1	22.9	28.9	18.4	14.3	15.4	24.8
k.子どもがゲームやYou Tubeばかり	23.5	38.9	43.4	45.8	57.9	47.6	23.1	44.1
l.家で何をしていたのか分からない	47.1	22.2	9.6	18.1	14.5	7.1	15.4	16.7
m.子どもの発音について	29.4	25.9	21.7	13.3	9.2	11.9	7.7	17.0
n.子どもの手話環境について	52.9	55.6	27.7	21.7	14.5	14.3	7.7	30.2
o.大人が手話を学ぶ機会がなくな	58.8	44.4	16.9	10.8	3.9	4.8	0	19.6
p.大人が相談できる相手がいない	35.3	13.0	8.4	8.4	5.3	0	0	8.4
q.大人が子どもに学校の宿題を教えられない	5.9	7.4	21.7	22.9	26.3	14.3	0	16.1

#### b)その他 設問 4 における自由記述回答

本設問は 17 項目から当てはまるものを選ぶのに加え、「その他」(自由記述回答)の選択肢も設けた。以下は、そこに記述された内容である。

なお、複数の聴覚障害児を有する保護者の回答の場合には、その回答内容がどちらの子どもに対して語っているのか明らかではないものも得られた。そのため、複数名の兄弟を有する場合には、回答結果の隣にその旨がわかるように表記をした(例えば小学生と中学生の兄弟がいる場合には、小／中と記した)。

#### <具体的発話>

- ・日記を続けるのが大変
- ・補聴器をつけてもすぐ外してしまう
- ・兄弟でのケンカが増えた
- ・オンライン授業の整備が出来てない事
- ・子どもですが、家にいるのが楽しいと言っています
- ・子ども同士の直接交流の中で得られるコミュニケーションの機会がまったくない。生きた教育がまったくないので、学習の定着が進まない
- ・食費
- ・せっかくの各教育関係の動画配信も字幕がなくて見られない。また要請してもやらないと断言される
- ・うまく休めなくて過労で体調がわるい
- ・コロナが怖くて、通院できない
- ・マスクが不便。口元が見えないからコミュニケーションがとりづらい。表情が見えない
- ・色々ありますが、医療従事者のために工夫して頑張っていこうと親子で話しています
- ・学年ごとにロイノートがあるといい
- ・子供が近い人としかコミュニケーションをとれないので、年相応のお友達や他人とのコミュニケーション能力を高める機会が減っていること

5)保護者の教育現場やその他の希望することに関する自由記述回答の結果

a)設問 5 教育現場に望むことに関する結果

設問 5 については、205 の回答結果が得られ、3つの大カテゴリと9つの小カテゴリに分類した(表 7)。なお、以後、大カテゴリは【】、小カテゴリは<>にて示す。

表7 教育現場に望むことに関するカテゴリ <自由記述>

		回答数	合計
オンライン学習の要望		77	
オンライン上での人とのつながりの構築を希望		42	
子どもの学習に関する要望	家庭での過ごし方・学習についての学校からの支援	28	156
	学校での学習の進度に関する要望	7	
	学級間の格差がない教育の実施	2	
保護者を中心とした支援	保護者支援	12	12
今後の学校生活の動き方について	学校再開・登校に関する要望	17	
	新しい生活様式での工夫・配慮	16	37
	学校の対応に関する要望	4	
合計			205

【子どもの学習に関する要望】に関する具体的な発話(156 件)

<オンライン学習の要望>

- ・学校に登校できなくてもよいので、オンライン授業や授業内容の動画を作ってくださいとありがたいです。(公立ろう・中)
- ・オンラインでの授業を短時間でもいいのでやってほしい。朝の会や帰りの会だけでもいいので。家での勉強よりはメリハリがついて良いと思う。(公立ろう・小)
- ・ウェブ学習の動画の音質が悪くて聞き取りにくいので改善してほしい。(普通校・小)
- ・授業動画では先生にマスクをはずしてほしい(普通校・小)
- ・動画を始めデジタルコンテンツにおける文字情報の保障を踏まえた配信をお願いしたいです。難しければ、読んでいる部分へポインターを当てるなどの対応をお願いしたいです。(普通校・小)
- ・手話に関する宿題、課題。手話による絵本の読みきかせの動画の配信などがあると、聴の家庭で手話が日常であり使うことのない子にはいいと思います。(公立ろう・幼)

<家庭での過ごし方・学習についての学校からの支援>

- ・子供に合った課題が欲しい。(公立ろう・小)
- ・学校からの連絡が少ない。課題が来ただけで返送もしなくていいし。オンライン授業をしるとは言いませんが、もう少し勉強の方で助言などいただきたいと思います。(公立ろう・高)
- ・親が家庭でどう対処したらいいかアドバイスがほしい(公立ろう・中)
- ・勉強を家庭にまかせっきりにしないでほしいです。これまでの進み方より遅くなってもいいので、皆がちゃんと勉強する気になるような環境を整えてほしいです。(難聴学級・中)
- ・休校明けの子供たちのフォローに関して、担任の力量によりフォローの差が出ぬよう、学校として学年単位で統一したフォローをしてほしい。(公立ろう・小)
- ・前年度の1ヶ月と今年度で授業が滞っているので心配。(普通校・小)

<オンライン上での人とのつながりの構築を希望>

- ・オンラインでも LINE でも zoom でも良いから子供と会話してほしい。親も子供も煮詰まります。週一でも良いから行かせたい。(公立ろう・小)
- ・少しでも学校との関わりが持てると本人の安心感につながると思いますので、保護者との連絡だけではなくテレビ電話などで先生と話せる機会が有ると良いと思います(公立ろう・小)

**【保護者を中心とした支援】に関する具体的な発話(12件)**

- ・聞こえない分、聴こえる子供達の倍、それ以上勉強しなくては身に付かないので。どう補っていけばいいのか…。(公立ろう・小)
- ・今年高3で卒業の年だが、就職も進学も厳しく、勉強も遅れ、将来がとても不安。(公立ろう・高)
- ・乳幼児期に保護者が手話を習得することが大切だと思うのでオンラインや、動画などで手話講座が受けられるとありがたいです。(公立ろう・乳)
- ・補聴器、音を楽しむための工夫をアドバイスしてくれる先生もいると助かります。(普通校・幼)
- ・先生ともっとお話をしたい。先生に子供の不安を知ってほしい先生の声を聞くだけで親が安心する。もっと時間がほしい。(公立ろう・中)

**【今後の学校生活の動き方について】に関する具体的な発話(37件)**

<新しい生活様式での工夫・配慮>

- ・収束後も 無理に登校しないで済むよう、登校と自宅学習を選べるような環境作りをしてほしい(公立ろう・高)
- ・希望者には留年や、新学期のスタートを遅らせるなどの対応をしていただきたい。(公立ろう・高)
- ・普通学校なのもあり、難聴児の認識が低いのは仕方ないとは思ってます。しばらくはマスクと換気対策で窓を開けたりとで聴きとりが今以上に困難になるのが不安です。(普通校・小)
- ・ウィルスの万全な対策(公立ろう・小)
- ・政府からの指示を待つのではなく、学校側からできることは本当はないのでしょうか？私立はオンライン授業で勉強が進んでいます。(公立ろう・中)
- ・グループ活動は仕方ないにしても、個別相談は定期的に対人でやってほしい(公立ろう・乳)
- ・感染予防第一でお願いしたい。あまり焦って登校させない方が良いと思う。(普通校・中)

- ・ろう学校は人数も少ないので、通学方法や時間帯など考慮しながら、学年登校などにして、週 1～3 日くらいでも登校出来たら子供の生活習慣にも学習習慣にもありがたいと思います。(公立ろう・小)
- ・都道府県の指示を待たずに生徒のことを考えて動いてほしい。(公立ろう・高)

b)設問 6 その他困っていることに関する結果

設問 6 については、116 の回答結果が得られ、3 つの大カテゴリと 9 つの中カテゴリとの 21 の小カテゴリに分類した(表 7)。なお、以後、大カテゴリは【】、中カテゴリは<>、小カテゴリは《》にて示す。

表8 その他困っていることに関するカテゴリ<自由記述>

		回答数	合計
子どもに関する困りごと	在宅学習に関する悩み	26	57
	運動や生活習慣に関する悩み	19	
	学校コミュニティとのつながりの維持	12	
保護者の困りごと	子育てに対する負担の増加	10	26
	子どもとの関わりの増加における精神的な負担感の高まり	7	
	子育てにおける学習指導の限界	9	
学校や社会への要望	学校運営や環境整備に関する要望	9	33
	キャリア発達を見据えた教員による指導	7	
	コロナ禍における聴覚障害者への配慮	17	
合計			116

【子どもに関する困りごと】

<在宅学習に関する悩み>に関する具体的な発話(26 件)

《在宅学習の定着の困難》

- ・幼稚部と同じことを自宅ですようとしますが、集中して取り組むことが難しい。(公立ろう・幼)
- ・ゲームすること、YouTube 見るのが悪いことだとは思いません。バランスよく勉強もして欲しいとは思いますが、反抗期に入ってきているので、親がどんな言い方をしても効き目はありません。親が子供に勉強させる事が出来たら学校なんて必要ないです。親が出来ないから学校があると私は思ってます。(公立ろう・中)
- ・学校に通うことと同等の学習はしてあげられない。友だちからの刺激がない中での自学には難しさを感じる。(公立ろう・中)

《学習計画立案に関する不安》

- ・宿題も課題も終わってしまって、追加で何かしら出してもらわないと、勉強する時間はどんどん失ってます。(公立ろう・中)
- ・課題を出す、勉強すべき点をアドバイスするなど、毎日少しずつ、確認しながら対応して欲しい。(公立ろう・高)

- ・幼稚部 1 年間で積み重ねたことがリセットされたような気持ちになっている(知的障害と重複のため特に)。(公立ろう・幼)

<運動や生活習慣に関する悩み>に関する具体的な発話(19 件)

《ゲームや SNS への依存》

- ・一日中 LINE 電話や Instagram のライブで同じろう学校の友達とずーっと話してます。それがいいのか悪いのか…(公立ろう・小)
- ・スマホやタブレット使用しているとそのままゲームやラインの誘惑に勝てずずるとやってしまう(公立ろう・高)

《規則正しい生活習慣の維持》

- ・朝は遅くまで寝て、夜も遅くまで起きている…運動もせず一日中テレビ電話…学校が始まって電車に乗って通学する体力がなくなっている気がします…(公立ろう・小)

《運動の機会の減少》

- ・外出自粛であり外に出られないので、運動不足が気になります。(公立/私立・国立ろう・中)

<学校コミュニティとのつながりの維持>に関する具体的な発話(13 件)

《他のろう学生との関わりの維持》

- ・チェック内容にもありますが、家庭内ではどうしても聴者の両親の為、手話環境が足りない部分があります。お友達や先生との関わりの中での手話環境が欲しいです。(公立ろう・乳相)
- ・お友達とのやりとりで成長するので、オンライン授業でお友達の顔や反応も見れる環境がほしいと思います。(公立ろう・幼)

《オンライン学習の整備》

- ・コーダの息子はオンライン授業等、学校側で準備して頂いてるのにろう学校は何もしてくれない(公立ろう・小)

## 【保護者の困りごと】

<子育てに対する負担の増加>に関する具体的な発話(10 件)

《仕事と育児の両立困難》

- ・親は仕事をしているので、十分生活を見てあげられない。生活のリズムが崩れ、イライラなどの精神面でも悪い影響が出ている。(公立ろう・小)

《昼食の用意に関する負担》

- ・食事は意識していますが【栄養バランス】が心配です。(公立ろう・小)

《オンライン環境の未整備》

- ・なんでもオンラインでの風習で、兄弟も多くパソコンも足りない。(公立ろう・高)



<子どもとの関わりが増加における精神的な負担感の高まり>に関する具体的な発話(7件)

《保護者の心理的不安・ストレス》

- ・毎日一緒でお互いにストレスが。自分がいつ手をあげ虐待に繋がるかわからない日々。(今はセーブしてますが)親のメンタル問題なども考えてほしい。(公立ろう・小)
- ・難聴児だとテレビの音量や子どもの遊ぶ音等がうるさい事に気付きにくく、巣籠り状態の下の階や隣の住民から苦情がくること。(公立ろう・幼)

<子育てにおける学習指導の限界>に関する具体的な発話(9件)

《手話を用いて勉強を教えることの限界》

- ・親の手話力では、限界です。(公立ろう・小)
- ・手話による授業がわかりやすいので、聴者の親には力不足で子供にもうしわけないかんじ。(公立ろう・中)

《保護者による学習指導の限界》

- ・聞き返しが多くまだ小さい子がいて忙しくてついライラしてしまったり、間違えていてもそのままにしまったりしてしまいます。(公立ろう・幼)
- ・一緒に勉強(主に数学)を見ているが、教えるプロではないので、うまく教えられない。勉強は教育のプロである先生に教わりたい。(公立ろう・中)

## 【学校や社会への要望】

<学校運営や環境整備に関する要望>に関する具体的な発話(9件)

- ・子供達のスポーツ大会が軒並み中止になっているのでコロナが終息したら代替大会を開催していただくと助かります。(公立ろう・幼)
- ・担任の先生とテレビ電話で話したい。メールが苦手なのでテレビ電話使用を認めて欲しい(公立ろう・乳／幼)
- ・通級での難聴学級は学校再開でないと進まないの、もう少し独立性があってもよいかと思います。(普通校・小)

<キャリア発達を見据えた教員による指導>に関する具体的な発話(7件)

- ・進路を考えなければならないが、動けない状況。また子供も「高校どうしよう?」と不安になり、休校が長引くにつれ、不眠になっている。(公立ろう・中)
- ・子どもの発達的に直接関わり合い方などのアドバイスをより必要とするタイミングで、学校がお休みなので困っている(公立ろう・乳)

<コロナ禍における聴覚障害者への配慮>に関する具体的な発話(17件)

《情報保障の整ったオンライン学習の実施》

- ・オンラインで勉強をやっているが、字幕は間違いが多いし、話す言葉も早くて子供が理解出来ず親がつきつきりで教える事になり、オンラインの意味があまりない。(公立ろう・小)

《マスク着用による聴覚障害者への弊害》

・学校が再開された後もマスク生活が続くと思うので、聞き取りにくさによる学校生活の支障がどれほどか気になる。(普通校・小)

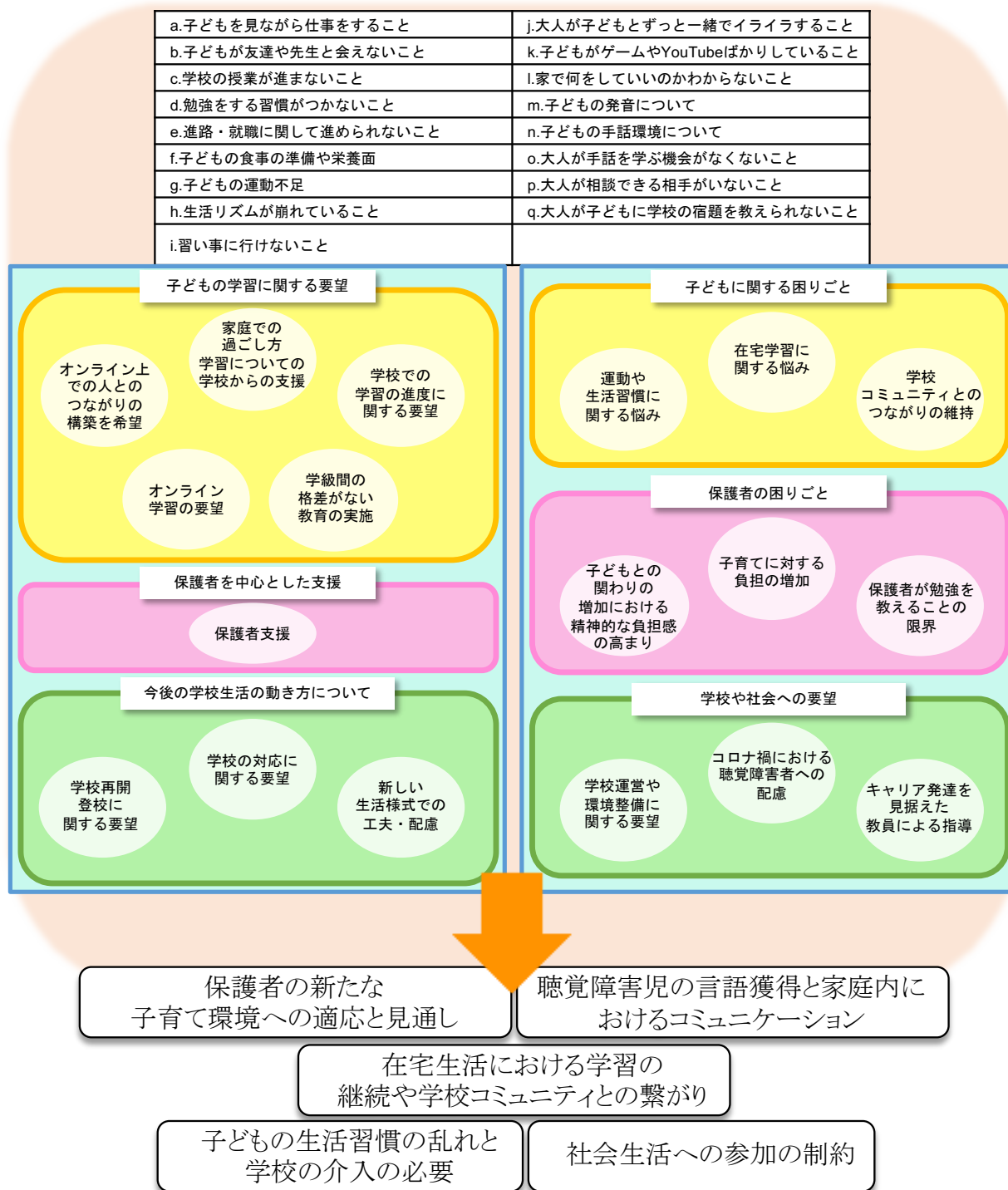
《聴力検査やリハビリの機会の減少》

・人工内耳の定期的なマッピングに行けないというか、行きにくいこと。緊急で調整が必要な状態ではないのですが、少し不安です。(公立ろう・小)

・娘がなかなか補聴器をつけてくれません。(公立ろう・幼)

#### 4. 考察

本調査の結果から、新型コロナウイルス感染拡大に伴う子どもに関するストレスや不安について、設問 4-6 の回答を分類、考察した。本項目では、これらの回答をその意味内容ごとに再度整理し、「保護者の新たな子育て環境への適応と見通し」「聴覚障害児の言語獲得と家庭内におけるコミュニケーション」「子どもの生活習慣の乱れと学校の介入の必要」「在宅生活における学習の継続や学校コミュニティとの繋がり」「社会生活への参加の制約」の5つに分類し、考察する(図1)。



コロナ禍における保護者の困りの分類(図1)

## ▶保護者の新たな子育て環境への適応と見通し

### ▷休校による保護者の不安感

休校中に、家庭でどのように過ごせばいいか分からず、不安を抱いている保護者の様子が伺えた。これは聴覚障害児の保護者のみではなく、健聴児の保護者への調査でも「外出自粛による保護者の子育ての負担感・不安感の増加」や「保護者同士の意見交換の場が減ったことによる孤立化」(教育新聞, 2021)が報告されている。

例えば、設問4で2歳児までの保護者の半分ほどが「家で何をしたらいいのかわからない」と答えていた。しかし、それ以外の年齢群の選択率はわずかであった。これらの結果から、乳幼児期の聴覚障害児をもつ保護者が特に子どもとの家での過ごし方が分からず不安を感じていることが伺える。なお、家庭での過ごし方の不安に関する自由記述回答は得られなかったが、筆者の過去の経験から鑑みるに次のように考えられる。

休校前は、保護者が学校に送迎をしている場合は毎日教員や保護者同士で顔を合わせて言葉を交わしており、励ましや他の保護者とのピアな関係性の中で子どものもつ聴覚障害について受容していける環境があった。しかし、コロナの影響もあり休校状態になったことはこれらの関わりや励ましの声を得られる機会を軽減させる状況となったといえる。このことは、保護者の心理的な不安を高めたのではないかと考えられる。

また、「子どもの発達的に直接関わり合い方などのアドバイスをより必要としているタイミングで、学校がお休みなので困っている」という発話にあるように、子どもの発達において1日1日が大切と指導を受けてきた中での休校は保護者に大きな不安を与えることになったと推察される。

このことから、改めて聴覚障害児教育に関する支援を行う社会資源や、オンラインなどを通して保護者が安心感を得られるような環境を提供していく必要がある。聴覚障害児の保護者が活用できる社会資源というのは、他の障害種別と比較しても少なく、一般的に知られていないのではないだろうか。例えば、コロナ禍において学校とだけでなく、社会福祉協議会の子育て支援などのサービスや聴覚障害者協会など地域の団体などの社会資源とも関係性を構築していれば、より保護者の負担が少なく、子どもにとっても過ごしやすい環境を提供できた可能性もあるのではないだろうか。それぞれの地域に在住する聴覚障害児が少ないことから、なかなか各地域にこれらの支援組織やサービスを位置づけることは難しいかもしれないが、SNSなどをうまく活用しつつ、安心して保護者と聴覚障害児が過ごせるようなコミュニティの設立も今後は期待されるのではないかと考える。

### ▷食事の支度に関する負担や子どもの栄養バランスへの不安

クックパッド株式会社(2020)が行った子どもの休校に伴う食事に関する調査では、「家庭の料理の負担が増えた」と回答する保護者は80%であった。これに対し、本調査での食事に関する負担感・不安感については3割程度の回答であり、その差が示された。この差について単純に比較することは出来ないが、次のように推察することが出来る。

ろう学校の幼稚部の例をとると、乳幼児教育相談の段階から聴覚障害児は保護者とともに学校での活動をする機会が多いこともあり、共働き世帯が少ない状況がある。そのため、「コロナを機に負担が増加した」と感じる家庭が少なかったのではないかと推察できる。障害のない子どもをもつ保護者と聴覚障害児をもつ保護者の困り感について比較検討した研究は管見の限り見当たらないことから、このことについて正確な推論を立てることは難しいものの、今後これらの子育てに対する認識の差について検討することも必要であるといえよう。

また、幼稚部の指導方針の中では、日常的に保護者と子どもが生活の中でともに過ごし、その中でやりとりをすることの必要性が伝えられていることが多い。例えば、調理をしながら「人参は野菜の仲間だね」などといったように言葉と概念を結びつけさせるための工夫をすることの必要について、保護者に強く伝える教育方針の学校も見受けられる。

今回の自由記述回答で調理に関する発話は見られなかったが、以下のような実態も予測出来る。即ち、上記のように日頃から言語指導に熱心に取り組んで来た保護者は、休校期間を様々な体験が出来る貴重な機会と捉え、今までよりも更に力を注いだケースもあるのではないだろうか。例えば、手順が複雑な料理に挑戦したり、その完成までの手順などについて、絵などを用いて詳しくまとめたりする家庭があったことは想像に難くない。そのような家庭の場合には、終わりの見えない休校期間中で、それらの体験をさせている事により、過度な負担感を与えてしまった可能性もあると思われる。

この他にも、従来、聴覚障害児教育の現場では、「聴覚障害児を産んだのだから、自分を犠牲にするのは当然だ」という家族の気持ちを感じることもある。今回も、そのようなかたちで聴覚障害児と関わっていた保護者がいるようであれば、ろう学校における保護者支援の在り方も考える必要があるだろう。また、保護者への精神的な負担を下げることは、保護者自身の生活のみではなく、聴覚障害児の成長にも大きな影響をもたらすと考える。保護者にとって大変な時に気軽に助けを求められる場や、自分の時間を作ることが出来る環境の整備も求められているのではないだろうかと考える。

#### ▷社会生活と子育てに関する両立への困惑

全国の働く保護者を対象にしたアンケートでは、休校中に仕事について悩んでいる保護者が 55%という結果が示されている(株式会社ポピンズ, 2020)。しかし、本調査では、1割程度という低い値を示した。このことの原因について検討するに当たり、まず大きな要因として前述したように幼稚部の段階でろう学校に入るために仕事を辞めている保護者が一定数存在することが挙げられる。言語獲得や子どもとの関わり方、障害の受け止め方について学ぶ必要などから子どもと一緒に幼稚部に通学してほしいということが保護者へ伝えられており、実際に入学とともに退職するケースも地域によっては多く見られる状況である。学年が上がるとともに再び仕事に就く保護者もいるが、子どもの休校が仕事に影響すると答えた割合はどの年齢群においても 20%を超えておらず、困難感が本調査では明らかにされなかった。

しかしながら、上述のような状況下で幼少期を過ごしてきた保護者にとって、そもそも健聴児よりも子育てに関して労力を費やすこと自体が当たり前であるといった感覚が形成されており、値に表れていないだけであり、労力自体は非常に大きい可能性もあるのではないだろうか。

このことについて踏み込んで検討しようとする場合、本調査では選択式の回答の「大人が子どもとずっと一緒にイライラすること」も高い回答率は示されていないが、自由記述回答では「毎日一緒でお互いにストレスが。自分がいつ手をあげ虐待に繋がるかわからない日々(今はセーブしてますが)親のメンタル問題なども考えてほしい」「反抗期に入り始めたのか、ストレスなのか母とケンカが増えました。家の中でドタバタ騒ぐ事も増えてきています…」といった発話なども見られた。これらはその困難の質的な状況を具体的に示す様子もあり、保護者にも聴覚障害児にも過度な負担がかかっていることが想像に難くない。

それらの精神的負担は、休校により一緒に過ごす時間が増加したことによるものなのか、その他の何かコミュニケーション等での課題なのかは本調査からは明らかになっていない。しかし、保護者の精神的負担についてはやはり学校や地域の福祉サービス等からの支援の少なさが関与しているのではないだろうか。即ち、それらの支援を受ける機会があれば、保護者が自身の子どもに対してマイナスに捉えていた行動について

も、違う観点から教員や他の支援員がプラスに捉えていることもあり、そのことを保護者へ伝えることも日常のかかわりにおいてあるだろう。このようなことの積み重ねの中で、保護者自身の子どもに対する捉え方が日々変容することもあるだろうが、今回のような閉鎖的な状況になった場合に、自身の子どもに対する否定的な感情などを捉え直す契機が保護者には作りづらく、精神的な負担が蓄積されていったのではないかということが考えられる。

## ▶聴覚障害児の言語獲得と家庭内におけるコミュニケーション

### ▷家族の手話獲得に関する機会の減少について

6歳以下の聴覚障害児を有する保護者の群では休校による手話学習の機会の減少について困っている様子が示された。「乳幼児期に保護者が手話を習得することが大切だと思うのでオンラインや、動画などで手話講座が受けられるとありがたいです」という発話からも手話学習の場を求める声が見受けられる。子どもとの隔たりのないコミュニケーション方略を模索することは愛着関係の形成、強化においても影響が強いと考えられる。幼児期の聴覚障害児の言語獲得の上で保護者との対話は欠かせず、また保護者の心理的な不安を解消するためにも、これらの言語獲得に関するニーズへの対応は求められる。

これらの傾向に対し、6歳以上の群では異なる傾向が示された。ろう学校の多くにおいて、中学部以降の保護者を対象とした手話学習の機会を学校として提供していないこともあり、コロナの流行を契機に手話学習の場を喪失した保護者自体は少ない傾向が示されていた。しかし、保護者からの手話の獲得に関するニーズとして、高等部の保護者から「教えるにあたっての必要な手話の学習語彙を学校が教えて欲しい」という声が示されていたことから、中等部以降の保護者に対しても手話学習の機会が必要であることが示されており、保護者が継続的に手話を学習出来る機会が必要であることがいえよう。また、このことは学習言語のみではなく、思春期以降の彼らの成長を考えた際には、日々の家庭内での相談場面などでより細かなコミュニケーションが求められる場合もあることが想定されることから、幅広い手話の獲得を実現出来るような機会や情報提供を行っていく必要が推察される。

### ▷家庭における言語獲得に対する不安

本調査では、家庭内でのコミュニケーションが十分に取れていない実態があることが浮き彫りになり、特に言語発達等への不安を抱えている実態が明らかになった。具体的な発話では「私の手話力が足りないから、勉強を教えられない」といったような学習に関する場面のみではなく、「聞き返しが多くまだ小さい子がいて忙しくてついイライラしてしまったり、間違えていてもそのままにしまったりしてしまいます」「(中略)手話による絵本の読みきかせの動画の配信などがあると、聴の家庭(聴こえる家族が多い家庭)で手話が日常であり使うことのない子にはいいと思います」というものもあった。

学校が休校状態にある中で、聴覚障害児にとってはその発達にとって重要な時期を迎えており、保護者は彼らの言語発達や学習の補助をする様子が見られた。これらの様子からは、教員による授業や学習指導の代替を保護者が努めようとする姿勢が伺えたが、保護者と教員らが元々有している本質的な役割の違いから、十分に代わりを努めることは難しい状況が示された。災害時の子どもの学習に関する課題は従来からその折々に触れられてきたことであるが、重大な感染症等が流行った際の対策についても、改めて検討する必要があると考えられる。

## ▶子どもの生活習慣の乱れと学校の介入の必要

### ▷子どもの運動不足と地域との繋がり

コロナ禍における運動習慣の継続についての関心は、聴覚障害の有無に関わらず高まっていると考えられる。文部科学省やスポーツ庁などが外出自粛中の運動についての情報を配信しており、2020年3月以降に健康の保持増進を企図した運動の動画を配信する自治体が増えていることから(朝日新聞, 2020)、その関心の高さが示されている。例えば、「運動不足」が大きな懸念事項として挙がっており(公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン, 2020、クラシエフーズ株式会社, 2020、認定 NPO 法人フローレンス, 2020)、本調査とも同様の傾向が示されていた。

本調査の選択式の回答においても一番選択が多かった項目は「運動不足」であった。ろう学校に在籍する子どもの多くは自宅から学校までの距離が長く、公共交通機関や自家用車を使用して通学することが多い傾向がある。このことと関連付けて考察するならば、帰宅後に公園などで遊べる時間が短いことや地域との繋がり希薄さから、地域の公園などで遊ぶコミュニティが彼らには確立していない可能性が推測される。

保護者からの具体的な発話を見てみると「分散登校でもいいし短時間でもいいから運動させたい。かなり運動不足になってるので」というように、運動の機会のために学校に行かせたいといった声も出てきている。また、子どもの心身の発達面においてもこれらは大きな課題であることを踏まえると、休校中の運動習慣の定着もまた大きな課題であることが示された。

しかしながら、これらの課題解決は容易ではないだろう。実際に体育の授業や遊びに関する動画として、室内で出来る運動を紹介している普通校やろう学校も多くあるが、運動自体が子ども同士の相互関係の中で行われる性質である以上、一人で自主的に運動不足を解消することは容易ではない。従って、これらのコンテンツのみでは十分な成果が得られないだろう。

今後はそれぞれの地域性や教材開発以外の観点も踏まえつつ、学校と保護者が協力をしながら更なる運動習慣のための仕組み作りが求められる。

### ▷休校による生活リズムの乱れ

選択式の回答に加え、自由記述回答にも「生活リズムの乱れ」についての発話が多く示された。具体的な発話には「朝は遅くまで寝て、夜も遅くまで起きている…運動もせず一日中テレビ電話…(中略)」「ウェブ授業など、朝から生活のリズムがつく取り組みをしてほしい」など、生活習慣の立て直しの手助けを学校に求めている声も示されており、このことは、普通校においても同様の傾向が示されている。柴田ら(2020)は、外出自粛により通学や通勤といった社会的制約がなくなり、就寝時刻、起床時刻が遅くなっている傾向にある。いかにコロナ禍において彼らの生活を整えるのかということは、保護者と学校が一体になって解決をはかるべき課題であると指摘している。

これらの問題の解決方法の検討にあたっては、本調査では「朝の会をやってほしい」といった保護者の声が複数挙がっていた。これは子どもの生活リズムの改善にも有効であり、教員にとっても負担が大きすぎないため、実現可能なアプローチ方法といえるのではないだろうか。

### ▷ソーシャルメディアの利用時間の増加と余暇の過ごし方

前項目の生活リズムの乱れに関する困り感の中では、You Tube や SNS、テレビ電話に割く時間の長さへの懸念が示されていた。これらの問題は一般社会においてコロナの流行以前にも社会問題化されていたことではあるが(松村, 2015)、今回のことを契機に課題意識が強まったのではないかと考えられる。

なお、聴覚障害児にとって、コロナ禍におけるスマートフォンなどの通信機器を活用する意義は主に以下の3つが挙げられる。①オンライン学習や自習の際の調べ物を行うこと、②ゲームなどの余暇の娯楽、③オンライン環境下で友達と会話をすることで心理的安定を図ることである。特に、聴覚障害児にとって③は同じコミュニケーションモードを持つ同年代の友人が地域になかなかいない中で、健聴児と比較した際にもその必要が大きいと推察される。

しかしながらこれらの通信機器の特性上、学習と余暇の切り替えをしつつ活用することは難しく、どのようにこれらについて扱うのかということについては、学校と保護者との連帯での教育・環境整備が今後もより一層求められる。例えば、学校としては、1. オンライン学習で使用している Teams や学びポケットなどで、意図的に教員や子ども同士の交流の時間を十分に確保することにより SNS の利用時間の適正化を促すこと、2. 教員が聴覚障害児間の輪に入りつつ、互いのやり取りを促進することで情報リテラシーやこれらのソーシャルメディアとの関わり方について喚起することの2点に取り組むことが出来るのではないだろうか。これらにより、子ども自身がこれらの問題について振り返るきっかけになるのではないかと考えられる。

### ▶在宅生活における学習の継続や学校コミュニティとの繋がり

#### ▶新たな生活環境下における学習習慣の獲得

選択式の回答の項目では「親が子どもに宿題を教えられない」という選択肢を選んだ保護者の割合は高くなかった。しかし、自由記述回答では「一緒に勉強(主に数学)を見ているが、教えるプロではないので、うまく教えられない。勉強は教育のプロである先生に教わりたい」「教えること自体が苦手で上手く伝わらない、考える力を育てたいのにどうしたらいいか分からなくてイライラ。(略)」といった在宅学習での悩みに関する発話が見られた。その他にも、家庭における学習については、具体的な事柄から学習を進めていく低年齢の子どもの群と、抽象的な事柄も含めて学習を進めていく年齢群とで回答内容の傾向が異なる様子が見られた。

例えば幼稚園や小学部では、「幼稚園と同じことを自宅でしようとするが、集中して取り組むことが難しい」「新型コロナウイルスで自粛中の今、なにをどうしていいのか…。ただ、学習の進み具合は心配です」という発話などが示され、生活の中で豊かな体験を積ませることに不安があることが想定された。また授業としての学習機会が増えてくる年齢群においては、どのように学習意欲を抱かせるかといったことが課題になっている様子が見られた。

これらの困難感について、それぞれの解決策を模索する必要がある。具体的には、乳幼児相談や幼稚園の場合には、乳児期からろう学校での指導を受けた保護者は、コロナ禍においても自身の子どもたちに対し、円滑に関わり教育している様子が伺えた。その半面、小学部以降においては、保護者から如何に聴覚障害児へ学習などを促すのか、といったことについて、困難を示す様子が見られた。普段から、ろう学校において、学習意欲を維持・継続させるためのノウハウを保護者に伝える機会はまだ得られていないことからこれらの影響は示されたといえよう。今後、今回のような休校状態が続くことが想定される場合には、学校には保護者の不安感をなるべく払拭出来るような丁寧な支援をしていく工夫が期待される。

次に、抽象的な概念や用語を使うことが多くなる年齢群では家庭内での学習指導上の限界についての発話も見られた。これらのような不安は聴覚障害児に限ったことではなく、健聴児の保護者も同じように感じている様子が報告されているが(妹尾, 2020)、両者の困難の相違点に着目するならば、次のようなことが考えられる。すなわち、日頃の学習において、聴覚障害児の多くは情報支援が整った塾やソーシャルメディアによる学習教材にコミット出来ない実態があり、このことがコロナ禍において大きな影響をもたらしていたの



ではないだろうか。通常の高校生は学習塾など学校以外のところで学習の理解を深める機会があることから、休校中においても学校以外の場所で学習を継続して行うことが一定程度出来ていただろう。一方、聴覚障害児の場合にはそのような状況になく、学習を進めるのにも保護者による補助的な指導がなくしては円滑に進めることが難しかったのではないだろうか。これらの課題に対し、再び休校が生じた場合には、どのように学校として解決をするのかといったことについて考えていかなければならない課題であるといえよう。

最後に、学校から提供される課題の量については、「習ってない宿題を与えないでほしい」という発話が表示されるとともに「宿題が少ない。世間では自らドリルを購入したりしているようだが、果たして不登校期間に見合った宿題の量なのか疑問なのでよく考えて頂きたい」といった発話なども見られた。これらの保護者ごとの回答の差異について、どのような状況が影響を与えているのかといったことについて本調査では十分な検討を行うことが出来なかったが、今後の対策としてこれらについて調査を検討することもまた必要であるといえよう。

#### ▷オンラインによる学習教材について

今回の調査で最も多かった回答はオンライン学習(授業)の実施に関する内容であった。休校措置がとられ、実際にオンライン授業を実施していた学校は全国でもわずかであった(2020,文部科学省)が、各種メディアではオンライン授業の先駆的な取り組みが取り上げられていたため、ろう学校に置いては、それらの学校と比較し、学習が遅れているのではないかという焦燥感が強くみられた。

また、オンライン授業をすれば現状を打破出来るのではないか、という漠然とした思いはあるものの、実際にオンライン授業などの関わりで何を学校の教員にして欲しいのかということについて具体的な記述に乏しい回答が多く見られたが、このことについては、次のように考察出来るのではないかと考えた。

初めのうちこそ在宅学習で出来る範囲で子供の学習が円滑に進むように努める様子が示されていたものの、子どもとの関わりの中で「毎日一緒でお互いにストレスが。自分がいつ手をあげ虐待に繋がるかわからない日々。(今はセーブしてますが)親のメンタル問題なども考えてほしい」「親の手話力では、限界です」といった発話が見られたり、また学習指導の観点でも、「zoomを使って勉強指導、生徒とのコミュニケーションをより活発にできないか?」といったことから、オンライン授業で彼らのコミュニケーション方法に即した授業の実施を求める様子が示されていた。この他にも、コミュニケーションの機会を日常においてどのように保障するのかといった側面からの発話も得られていた。具体的な発話として「チェック内容にもありますが、家庭内ではどうしても聴者の両親の為、手話環境が足りない部分があります。お友達や先生との関わりの中での手話環境が欲しいです」などという内容が得られたことから、聴覚障害児のコミュニケーション方略や発達段階に即した形での保護者への対応、また会話の機会の確保に関する必要が指摘されている。

聴覚障害児及び、その家族にとってのオンライン学習は上述のように学習を進めることももちろん目的としてはあるが、それ以上にコミュニケーションを円滑に行える場としての期待が大きいのではないだろうか。そのような点を踏まえると、前述したように授業は出来なくても朝の会だけでも行うなど、友達や教員とやりとりをする場を提供することを目的とした時間を設定することから始められるのではないだろうか。

#### ▷友人関係や教員と家庭のつながり

選択式の回答項目で2番目に選択が多かった項目が「友達とのつながり」であった。この項目はどの年齢群でも困っていると回答した比率が高く、3-5歳群は友達や先生との関わりを望んでいることが推察される。この傾向は普通校を対象にした調査においても同様の回答傾向が示されていたが(国立研究開発法人国

立成育医療研究センターコロナ×こども本部, 2020、マザークエスト, 2020)、その意味内容は普通校を対象にした調査結果とろう学校のみを対象にした場合には異なる可能性が推察された。

具体的には、「チェック内容にもありますが、家庭内ではどうしても聴者の両親の為、手話環境が足りない部分があります。お友達や先生との関わりの中での手話環境が欲しいです」「親が聴者で手話環境が減っている」「聴こえないという事で、普通以上に情報も入らず手話も使えないという不安な状況にある生徒が心配ではないのかと思います」といった発話などから聴覚障害の障害特性に特有のニーズが示されていた。つまり、学校に通わないということは、単に友人とのつながりが希薄になるということではなく、彼らの場合には、同じ文化や聴覚障害児としてのピアな体験を有する同年代の友人が地域に居ないことから、それらの相手とのコミュニケーションの機会の喪失を意味しているのである。

この他にも保護者からは「先生ともっとお話をしたい。先生に子供の不安を知ってほしい先生の声を聞くだけで親が安心する。もっと時間がほしい」「先生と保護者間で簡単な近況報告やアドバイスなどがあれば嬉しいです」などの発話があるように、学校との密な連携を求める様子も見られることから、今後は保護者対応の拡充も視野に検討する必要があるといえよう。

### ▶社会生活への参加の制約

#### ▷学習の機会や教材へのアクセスについて

情報アクセスについては、2つの場面に於いて異なる傾向が示された。オンライン学習教材については、聴取能力などによって、「動画内の話者がマスクをつけたままである」「動画の音質が悪くて聞き取りにくい」などの困り感を有しており、また、授業に字幕がついていない場合には理解出来ない様子があった。このような中で、動画教材に対する情報支援の程度の差があることは致し方ないことではあるが、聴覚障害児がいることを予め想定し、教材開発をする必要が改めて推察された。

また、これらの教材開発を持って、聴取能力が高い聴覚障害児については、難聴学級も含め、本来の学習に遅れなくついていくことが出来る可能性が示唆されたが、他方では、日本語の体系的な理解が十分ではない聴覚障害児や重複障害児には字幕を挿入したオンライン学習教材の開発をした上でも、なお、十分な対応が出来ておらず、手話を活用した教材開発などの必要性が示されており、その開発に遅れが出た場合、健聴児童や字幕を読むことで授業内容が理解出来る聴覚障害児と比較し、学習の進捗に大きな影響がもたらされる状況にある。

次に、対面での授業場面を想定した際にも、音声の聴取能力次第では、大きな課題があることが発話より示された。従来、騒音下における聴取は聴覚障害児にとって困難を強いられることが知られているが、コロナ禍における換気の必要やマスク着用の必要がより高まったことから、対面における聴取或いは口話の読み取り環境は、著しく悪い状況となっている。コロナウイルスが流行し既に1年以上が経っており、長期化したこのような聴覚障害児にとっての劣悪なコミュニケーションの状況というのは、彼らの学習の理解度などにも大きな影響をもたらしている。

これらを踏まえると、聴覚障害者コミュニティ全体として、このような長期化したマスクの装用などが求められる状況になった際に、特に日本語の体系的な理解が難しい児童たちに対し、どのような教育体制が求められるのか、といったことについて今後検討する必要があると示されたといえる。

#### ▷進路選択・就職活動に関して

進学選択や就職活動への不安に関する回答は高等部から多く得られた。具体的には、「進路を考えなければならぬが、動けない状況。また子供も「高校どうしよう?」と不安になり、休校が長引くにつれ、不眠になっている」などと挙がっている。このことは、普通校を対象にした調査(2020, 高校生新聞 ONLINE)と比較しても回答傾向にあまり差が見られなかった。

しかしながら、聴覚障害の特性やろう学校の教育の特色を踏まえた場合には、次のようなことが考えられる。第一に、小学部や中学部の段階においては、同じろう学校から上の学部へ進学する場合、再度入学試験を受けるものの、実態としては内部進学とあまり大きな差がないことから進路についての不安が小さいのではないかと推察される。しかしながら、高等部を卒業する場合には、大学や専門学校、専攻科への進学、就職などの選択肢が広く、様々な情報の中から進路を検討する必要がある。例えば、情報支援技術や通訳の活用なども含めて検討することから、より高等部の進路担当教員などとの連携を強化することが求められるだろう。或いは、実際に様々な説明会に参加をし、主体的にこれを検討する必要があるが、コロナ禍という影響もあり、これらが上手く進まなかったことも彼らの不安を高めていた可能性が推察される。今後の検討課題としては、これらの回答数のみに着眼するのではなく、彼らの抱える困難が質的にどのように違いがあるのかといったことについても踏まえた検討が必要といえる。

#### ▷余暇生活におけるコミュニケーションの課題や聞こえに関する通院への戸惑い

コロナウイルスの影響は家庭内や学校だけに留まらず、社会生活の中にも及んでおり、例えば、習い事に行けなくなったという声が上がっていた。習い事に行けている子どもの中にはいるが「口を見て指示を把握していた子ども達がマスク着用によってそれが出来なくなった」「ロジャーがマスクを使うことで効果を発揮しているのか保護者が不安になっている」という意見があるなど今までになかった社会生活上のコミュニケーションについての障壁を感じている様子が伺えた。更に、緊急事態宣言により習い事が中断されているケースもあると思うので、今後更に困り感が出てくるのではないかと予想する。

また、これらの困難感を解決する方法として、1 つは補聴の定期的な管理に行うことなども考えられるが、これについては、次のような発話が見られた。「人工内耳の定期的なマッピングに行けないというか、行きにくいこと。緊急で調整が必要な状態ではないのですが、少し不安です」「聴力検査、耳鼻科の診察に行きたいが、行くまでに公共交通機関を使う為コロナに感染するリスクがあるので行けていない」という発話からは、子どもの発育に対するマッピングや聴力検査などの必要に関する判断が保護者には難しく、コロナへの感染対策などの観点からも、いつどのタイミングで検査に行くのかといったことについて困惑する様子も見られていた。実生活では、マスク越しで口読めないことや、オンライン授業で声をいつも以上に聞き取るのに苦労する場面なども増加している状況である反面、コロナへの感染を懸念して病院に行けない保護者の存在を考えると、例えば、このような災害時、ろう学校内でマッピングや聴力測定などが出来る環境を整えるなどの対応があってもよいのではないかと考えられる。

## 5. おわりに

新型コロナウイルスや、それに伴う感染防止対策は、今もなお、世界中の子どもたちの生活に影響を与えています。このことは、子どもたちの教育現場でも同様であり、昨年の4月ごろには休校措置やオンライン授業について連日のように報道で取り上げられていました。そのような中、家庭では、在宅学習やテレワークなどにより生活環境が変わり、ろう学校では、急な課題や新しいデジタル教材の作成に追われる状況に教員たちは立たされていました。私は、これらの両者の大変な声を聞く中で、特に保護者の皆さんの不安や悩みの1つ1つに対応しきれない状況についてもどうかしう思い、本調査を執り行いました。

本調査の設計をする段階では、「聴覚障害児の保護者の数名からだけでもご意見をいただければ良い」と考えていた部分が大きくありました。ご覧いただいてもお分かりになりますように、本報告書は非常に簡易的なものとなっています。聴覚障害児教育について、提言するために必要なデータが十分に集まったものではないかもしれません。しかし、少なくとも最終的に集まった311件の回答から、改めて家庭で抱えている不安感や課題などが見えてきました。また、保護者の方々の子どもたちへの想いや学校への期待を非常に感じ、それを多くの方に知っていただきたいと思い本報告書の執筆に至っています。

本調査を通して一番感じたことは、保護者の皆さんの子どもたちへの温かく、そして熱心な想いでした。私は教員として幼稚部経験が長く、保護者の方と話す機会が多くありましたが、そのやりとりの中では知る事の出来なかった想いや考えが回答には多く詰まっていました。このことは、自分自身の教育・指導を振り返るきっかけにもなり、また今後の教育活動にいかにか活かしていくか考えさせられるものとなりました。

一方で、保護者の方のご意見を伺う中で、「学校側の事情もあるのだ」ともどかしう思う点もありました。聴覚障害児の教育は、学校任せでも家庭任せでも上手いかず、学校と家庭、また関係機関との協働が重要となります。本調査結果をお読みいただいた皆さんには、本調査結果を踏まえ、お互いの事情や背景、想いを知り、子どもたちの良さを最大限に伸ばすことが出来るよう、学校と家庭がうまく連携していく懸け橋となることを期待します。

最後に、休校措置・外出自粛中という大変な時期に、このアンケートに協力して下さった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。人となかなか会えない今、このように全国の方々とアンケートを通して繋がりをもてたことを嬉しく思います。久しぶりに連絡を取らせていただいた聴覚障害児教育関係の仲間や保護者の方々に改めて御礼申し上げます。また、東京都立大学ダイバーシティ推進室の益子徹さんには、調査分析の段階から報告書の執筆においてアドバイスを頂きました。早朝から深夜、休日とプライベートの時間を割いて長くサポートをして下さったこと、この場を借りて深く御礼申し上げます。皆様との支え合いがあってこそ教育活動が出来ると改めて実感いたしました。今後とも、よろしく願いいたします。

石川 阿

## <資料 1 引用文献>

- ・朝日新聞.”休校ストレス保護者 8 割、児童 6 割 NPO が緊急調査“2020.5.21(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”<https://www.asahi.com/articles/ASN5P4667N5NUTIL02H.html>”
- ・クックパッド株式会社”クックパッド、「臨時休校に伴う家庭の料理負担の実態調査」を実施 80%が料理の負担増を実感、72%が「昼ごはんの準備」に困る”2020.3.10(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://info.cookpad.com/pr/news/press\\_2020\\_0309](https://info.cookpad.com/pr/news/press_2020_0309)”
- ・妹尾昌俊,「宿題わたして、あとはよろしく」休校中の学校に高まる保護者の不満、悲鳴【休校中の宿題問題(1)】”,2020.5.12, 最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“<https://news.yahoo.co.jp/byline/senoomasatoshi/20200512-00178141/>”
- ・株式会社ポピンズ,”働く保護者様へのコロナ影響 緊急アンケート結果“2020.5.13(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000050.000029613.html>”
- ・国立研究開発法人国立成育医療研究センターコロナ×こども本部,コロナ×こどもアンケート第 1 回調査報告書,2020.6.22,(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomo/report/report\\_01.pdf](https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/report_01.pdf)”
- ・公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン.”「子どもの声・気持ちをきかせてください!」2020 年春・緊急子どもアンケート結果(全体版報告書)“2020.5.3(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/kodomonokoe202005\\_report.pdf](https://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/kodomonokoe202005_report.pdf)”
- ・高校生新聞 ONLINE,”新型コロナが高校生の進路選択に影響「志望校を決められず」「家の収入が減り…」”2020.05.13(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“<https://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/6348>”
- ・クラシエフーズ株式会社.”クラシエ子どもとおかしのアンケート”ト Vol.17 新型コロナウイルスによる休校時の母と子のコミュニケーションに関する意識調査 コロナ休校で子どもとの時間の増加に喜ぶ一方、母親の約 3/4 が家事や育児にストレスを感じる”2020.7.2(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www.kracie.co.jp/release/10162935\\_3833.html](https://www.kracie.co.jp/release/10162935_3833.html)”
- ・教育新聞.”「コロナ禍で家庭教育支援に課題」都道府県の 9 割”2021.2.18(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”[https://www.kyobun.co.jp/news/20210218\\_02/](https://www.kyobun.co.jp/news/20210218_02/)”
- ・松村真木子(2015)「子どもをめぐるインターネット環境の変化:新聞記事(2007 年～2015 年)の分析」  
埼玉学園大学紀要.人間学部篇(15).
- ・文部科学省.”オンライン教育の重要性と課題”2020.7.1(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2020/0708/shiryo\\_01-3\\_2.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2020/0708/shiryo_01-3_2.pdf)”
- ・文部科学省.” 新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取組状況について”2020.4.16(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt\\_kouhou01-000006590\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_kouhou01-000006590_1.pdf)”
- ・文部科学省.”新型コロナウイルス感染症対策のための学校における臨時休業の実施状況について”  
2020.3.31(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)  
“[https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt\\_kouhou01-000006590\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000006590_1.pdf)”
- ・マザークエスト,”学校教育の現状とこれからの期待に関する保護者アンケート報告”2020.12  
(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”<https://www.motherquest.net/report/>”

- ・認定 NPO 法人フローレンス.”全都道府県約 1 万人の親が回答！子ども達への多大な負担が明らかに～「一斉休校に関する緊急全国アンケート」調査結果公開～”2020.3.10(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”<https://florence.or.jp/news/2020/03/post38598/>”
- ・柴田重信・田原優・株式会社 asken らの研究グループ.”早稲田大学とあすけんコロナ禍の外出自粛で生活リズム変化～3 万人規模の調査成果を発表”2020.9.11(最終アクセス日:2021 年 4 月 11 日)”<https://www.asken.inc/news/2020/9/11/-3>”

## <資料 2 質問紙>

### 休校中の困り感について

とある県のろう学校で勤務しております。

幼稚園児・小学生の保護者の休校中の困り感に関するアンケートが多く取られています。聴覚障害児をもつ保護者の方は聴児の保護者と同じような困り感も持っていると思いますが、また違う困り感もあるのではないかと考え作成しました。休校が長引く可能性がある中、今何に困っているのかを把握できればと思っています。結果が多く集まれば現場に声を届けられればと考えています。

1人でも多くの保護者の方に答えていただければ幸いです。  
☆多目標の300名達成いたしました。ありがとうございます。5月6日分までのものを一度まとめさせていただきます。

今後も、休校など続くかもしれませんので何か伝えたいことがあればぜひこちらでお伝えください。SNS等でシェア大歓迎です。よろしく願いいたします。

#### 教育の場 \*

- 公立ろう学校
- 私立・国立ろう学校
- 難聴学級
- 普通校
- その他...

#### おさんの年齢（4月1日時点）（兄弟も聴覚障害児の場合は複数回答可） \*

- 0～2歳
- 3～5歳
- 6～8歳
- 9～11歳
- 12～14歳
- 15～17歳
- 18歳以上
- その他...

#### 保護者の方について \*

- 聴者
- 聴覚障害者（手話使用）
- 聴覚障害者（音声日本語使用）
- 聴者・聴覚障害者両方がいる
- その他...

今、お困りなことは何ですか？（複数可）\*

- 子どもを見ながら仕事をすること。
- 子どもが友達や先生と会えないこと。
- 学校の授業が進まないこと。
- 勉強をする習慣がつかないこと。
- 子どもの運動不足
- 生活リズムが崩れていること
- 習い事に行けないこと
- 大人が子どもとずっと一緒にイライラすること
- 子どもがゲームやYouTubeばかりしていること
- 家で何をしていたのか分からないこと
- 子どもの発音について
- 子どもの手話環境について
- 大人が手話を学ぶ機会がないこと
- 大人が相談できる相手がいないこと
- 大人が子どもに学校の宿題を教えられないこと
- その他...

教育現場に望むこと

記述式テキスト（長文回答）

---

...

その他、今お困りのことがあればお書きください。

記述式テキスト（長文回答）

---